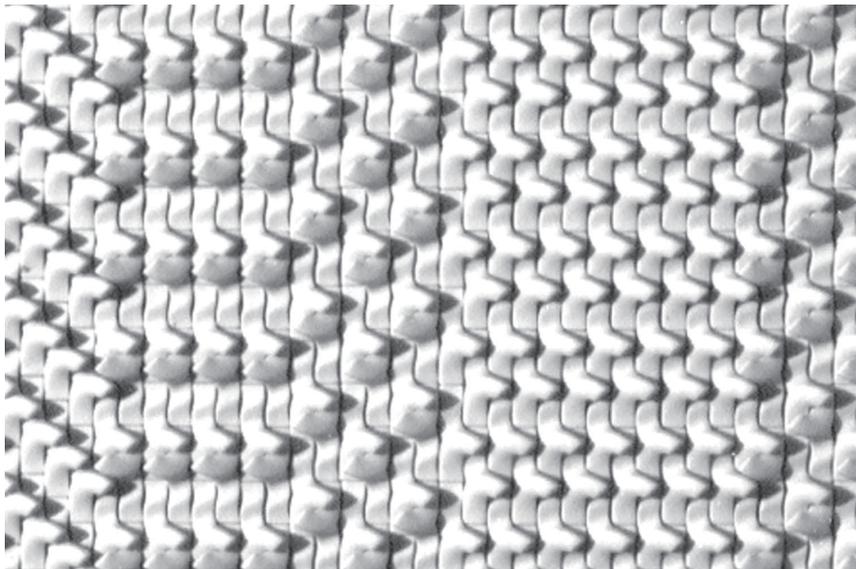


會田雄亮 「陶織」
910mm × 910mm



2014年11月 会報69号
一般社団法人
日本建築美術工芸協会



「陶織」

會田雄亮

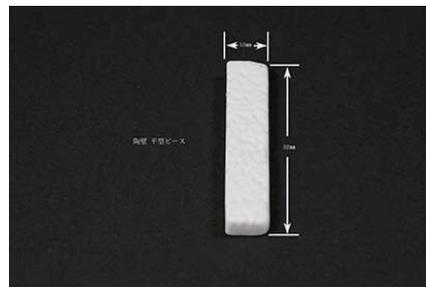
陶芸家・環境造形作家
 東北芸術工科大学名誉教授
 日本建築美術工芸協会会員
 同協会 元理事
 AACA賞 元選考委員



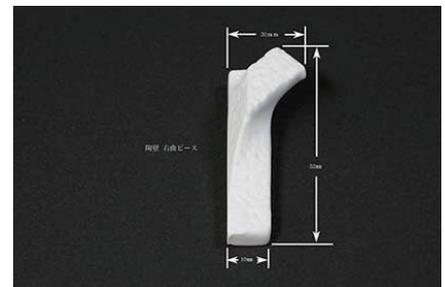
陶織はピース3パターンの組み合わせで制作します



左曲ピース H 52 mm W 20・10mm



平型ピース H 52mm W 10mm



右曲ピース H 52mm W 20・10mm

CONTENTS

aaca 景観シンポジウム			
「新しい都市景観へ - 東京のこれから -」開催報告	岡 房信		3~4
時代の華一輪	「彫刻と空間」	糸屋 正	5
時代の華一輪	「空間に絵を描くように」	高柳登美	6
aaca 調研 トーク 「パブリックプレイスとアート」		南三一郎	7
第184回aaca フォーラム 「彫刻その宇宙への夢」		米林雄一	8
会員活動レポート	「箱根研修旅行記」	三上紀子	9
文化事業委員会（展覧会部会）レポート			10
総務委員会レポート			11
新入会員・会員の移動・募金のお願い			



岡 房信

三井不動産 A E (株) 会長

日本建築美術工芸協会常務理事
景観シンポジウム委員会担当

平成 26 年度景観シンポジウム事業の第 1 弾にあたる頭記のシンポジウムは、去る 7 月 3 日（木）に東京ガス株式会社本社大会議室をお借りして開催されました。今回の参加申込者数は学生を含め 415 名、当日の参加者数は 393 名、うち 190 名の方々にはシンポジウム終了後の交流会にも参加頂きました。



今回のシンポジウムは、岡本会長の「シンポジウムは毎年 2 回開催」という方針を受けてから第 2 回目にあたります。



当日の内容は会報別冊に譲ることとして、本稿では企画・運営面での工夫を中心に報告させて頂く事とします。前回の景観シンポジウム「明治神宮と原宿」での工夫を踏襲した所もある一方、趣を変えた工夫もありますので、以下に順を追って報告します。

① テーマ・登壇者について

前回の景観シンポジウム「明治神宮と原宿」では、〈東京の景観遺産を再評価する〉というコンセプトの下、対象に密着した活動を永年行ってこられた方々に登壇頂き、対象地域に何らかの関心を持つ幅広い方々の集客を目指しました。この企画を進めている最中の昨年 9 月に 2020 年オリンピック・パラリンピックの東京開催が決定しましたが、それ以来、景観シンポジウム委員会としては「2020 年に向けて東京の景観はどのように変わっていくのか？」が次のシンポジウムのテーマ候補になっていました。

そこで検討すべきは、どのような聴衆を想定して、どなたに登壇いただき、1 月の景観シンポジウムとの差別化を図るか？検討の結果、今回は「2020 年に向けて東京の景観が変わって行く」事を正面に据え、その最前線に居られるスーパー G C 5 社の設計本部長の方々に登壇をお願いし、ファシリテーターを馬場璋造氏にお願いする事としました。また集客活動もこの分野に関わりの深い方々に重点を置く事としました。しかし結果としては学生の参加者も迎える事が出来ました。



前回と今回とどちらの取り組みが良いかということではなく、景観シンポジウムを継続させるには今後もこれらに限らない様々な工夫が肝要と考える次第です。

② 会場・参加費について

今回の会場は、東京ガス株式会社の本社施設を借用させて頂く事としました。同施設は、2009 年にコーディネーターを馬場璋造氏にお願いし、大手設計事務所 6 社のトップに登壇頂いた aaca 設立 20 周年記念シンポジウム「環境に生きる建築・美術・工芸」の際にも

借用させて頂いたものです。東京ガス株式会社の関係者の皆様には事前の調整はもとより当日の館内誘導に至るまでご協力頂き、シンポジウム並びに交流会を無事完遂する事が出来ました。この場を借りて、東京ガス株式会社の関係者の皆様に改めて深く御礼を申し上げます。



次に参加費についてですが、景観シンポジウムが協会に対する収益上の貢献も期待されている事を鑑み、今回は前回よりも若干高額に設定させて頂きました。なお前回同様に交流会費はシンポジウム参加費とは区分し、金額も実費程度に抑える事としました。また、会場として借用している施設が非営利施設であり、会場での参加費の授受が先方にご迷惑をお掛けする恐れがあるため、参加者の皆様には参加費の事前振込の徹底にご協力いただく事としました。



お陰様で当日の受付業務やシンポジウム終了後の交流会への誘導も円滑に進み、冒頭に記したとおりの多数の方々にご参加いただく事が出来ました。また、協会から期待されていた収益面での貢献も、概ね果たす事が出来ました。ここに皆さまにご報告すると共に、関係者の皆様に改めて篤く御礼を申し上げます。



③ 事務作業の効率化について

前回の報告でも述べましたが、岡本会長が提唱されている「aacaは、毎月、何かのイベントを開催している」という状況を実現する上で、事務作業の効率化は極めて重要と考えられます。シンポジウムの実行にはテーマ・登壇者の選定を含む企画立案もさることながら、その後のパンフレット作成、参加申込書の発送を含む告知・集客、参加費の入金確認、参加証の交付、当日の受付、収支報告、記録の発行等々、膨大な量の事務処理を行う必要があります。シンポジウム委員会は独立した委員会ではありますが、これらの作業を独力で処理する事は不可能です。このため、実際には主に文化事業委員会メンバーによるボランティア作業と事務局からの支援を仰いで事務作業を進めていますが、これらの作業の効率化に向けた工夫も少しずつ進めています。

一番目の工夫は、前回の景観シンポジウム以来利用可能となった事務局の共用パソコンに過去のシンポジウムに関するデータを保存する事です。これによって、関係者は何時でもデータを見る事が可能になりました。

二番目の工夫は、上記の共用パソコンに保存されたパンフ、参加申込書、参加者リスト、参加証等の書式を標準化し、それらを反復利用する事です。また、記録誌の原稿は従来エクセルで作成していましたが、会報で使用しているワードに共通化しました。こうした標準化、共通化は、様々な事務処理を分担可能なものにする基盤として重要です。

三番目の工夫は、今回からシンポジウムを含む各種イベントの参加手続き専用のメール・アカウントが開設された事です。これによって、メールによる申込に関する事務処理の円滑化が進みました。

以上に記した通り、シンポジウムの実施には様々な工夫が必要ですが、皆さまのご支援のお蔭で今回も無事終了しました。シンポジウム事業が、今後も“持続可能”な事業となるよう、引き続き皆さまのご協力を宜しくお願い申し上げます。（以上）



梶屋 正

KAJIMA 彫刻コンクール 幹事長
 (株)イリア シニアプロデューサー
 日本建築美術工芸協会会員
 <街なかミュゼ> 出展作品選考委員長

私は建築空間をつくっている立場でありながら、アートプロデュースに携わるといふ機会に恵まれ、そういう感覚で建築を創るといふことを長年してきました。私は30歳代から空間づくりの際に、建築的に表現しきれないところにはアートを平面でも立体でも設置すると、その空間がより魅力的になったケースをいくつか体験し、建築とアートの関係を考えるようになりました。空間を創り上げるのに例えば建築的に特に仕上材等で幾らかのコストダウンを考え、そのお金を何等かのアートに回すことを心掛けてきました。快適な意味のある空間を創り上げるのに、究極、アートが存在するのが大変重要なことと考えております。70年代初期には数年間ドイツ赴任を体験し、機会を見ては欧州の国々を見て回り、建築とアートが共存している姿に、日本とは違う何かを感じておりました。89年は鹿島の



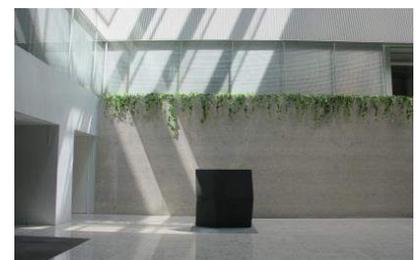
第13回金賞作品 (KIビル アトリウム)

創業150年に当たり、KIビル(内部空間は全て私のデザインによる)というインテリジェントオフィスの完成を機に、KAJIMA彫刻コンクールを行うこととなり、私も第1回目から関わりました。ビエンナーレで行われ、今年の春で第13回目を終えたところです。色々な体験をするうちに、色んなことが解るようになりました。即ち建築空間とアートの関係についてです。建築家は建物を設計するとき、様々な角度からどのような建築・空間を造ればよいかを考えなければならないと思います。例えば建物が建つ周辺の環境、そしてその地域の街並みや歴史、いわゆる敷地のコンテクストです。それらの要素を考慮した上で、提案はあるべきだと考えているからです。一方で、KAJIMAでのアートプロデューサーとしての私は、よい彫刻に出会った時、その彫刻が置かれるべき空間とはどういうものなのかということを考えます。色々なアーティストに出会い、空間を創るものとして、空間にはアートが必要であるという考えでお話をします。しかし建築空間と彫刻の関係についてお話をする人が殆どいないのは残念なことです。作家は自分の想念のもとに自分の作りたい作品を制作されるのが一般的ですが、その作品が置かれるであろう空間を考えて作る人がどの程度いるだろうか。

彫刻が空間に置かれる場合に4つのパターンがあると思います。

1. 彫刻をただある空間に置きたいから置く。
2. 彫刻をその場所に合うように置く。
自分の作品はその場所には合わないから置いてほしくないということぐらいは解ってほしいのだが。通常は2のケースで作品設置が行われるのが多いと思われるが、私が求める空間とは、
3. その場所を理解して彫刻を置く、ないしはその場所を理解して彫刻を作ってもらう。
私の場合は、具体的にKAJIMA彫刻コンクールに出品された数百の作品の中から求められる空間に合いそうな人及びその人の作品の傾向から判断し、提案を持ちかける場合があります。

4. その空間を決定づける為に、彫刻を置く。
これが一番重要だと思っております。空間を具体的に説明する時、空間の色彩や、空間の空気の匂いや、音で表現されることがあります。空間を決定づける作品とは作品のエネルギーが空気感をより一層濃くし、空間と相互作用を起こすことを目指します。KAJIMA彫刻コンクールの1次審査を通り、2次に進まれ実際の大きさに制作される作家の制作現場にお邪魔をし、色々お話をし、作家の考え方や制作意図を改めて聞き、作品をどのような環境に置きたいかを話し合います。当コンクールの審査展示はKAJIMAのKIビルで行われます。コンクールも13回を経ましたので、殆どの作家はどういう処に置きたいかをお聞きすることが出来ますが、以前は考えたこともないし、お任せしますが多かったです。それはコンクールのテーマである「彫刻・建築・空間の調和」が理解されてきたからでしょう。魅力を感じる所謂、よい作品は何処におかれても魅力を発しますが、しかし作品の持っているものを最もよく表してくれる場所に置くことにより、その作品の力が倍加されることを今迄何度も体験してきました。世界的に評価されている建築家は建築本来のものをつくっている。紀元前30年頃のローマ人ウィトルウィウスという



第12回金賞作品 (KIビル アトリウム)

人が著した「建築十書」中で、建築家たらんとするのは、絵画と数学を学ばなければならないと書いています。15世紀には、ヨーロッパで最も優れた建築家のひとりであり建築評論家でもある、フィレンツェのレオン・バチスタ・アルベルティは、建築はあらゆる分野の学問の総合芸術と捉えています。芸術は人の生活を豊かにする役目があり、建築はその大きな部分と考えられていたからです。



高柳登美

ガーデンデザイナー・画家

日本建築美術工芸協会会員

日本美術家連盟会員

絵を描くように空間を造型する。庭を造ることが私の仕事。大地と空とはキャンバスであり、樹木の緑や草花の色彩を無尽蔵の絵具箱として、私は作品を造る。大地から得られる石材のマチエールは私にとってはダイヤにもまして貴重な作品の素材となる。

自然の恵みから始まる私の仕事に自然への感謝の尽きぬことはない。だからこそ、自然の美の最大限の可能性を庭に託す。日々の散策の折にも、車を駆っての移動にも、そして勿論、旅路にあっても私の視線はいつも、景色景観に収斂されてゆく。自然というこの地球の宝を、私の手でいくらかでも「より良く」いかしたいと思うのである。「残念な」空間を目にするにつけ有り余る仕事への可能性に思いをはせる。

北海道の大地、モエレ沼にイサム・ノグチは生涯の仕事の集大成として「地球を刻む」仕事を残した。札幌郊外のゴミの舞い散る広大な荒野を彼は人々の楽園に変えた。天に至る道のある山を築き、風の吹き抜ける草原には小川をうがち、豊かに水をたたえる池畔の長い水際には子供たちの歓声が、森や空に吸い込まれてゆく。

私もいつの日か、この地球の大地に壮大な美しい絵を描くように「楽園」を造ることを夢見る。木々は鬱蒼とした森を作り、一本の大樹は優しい陰を落とし、草原に咲く草花は色彩の織りなす絨毯となる。小道を行けば、よく手入れされた果樹の庭があり、実のなる木には手が届く。誰もが自由に行き来し、憩える場所は、この世の楽園。



2010国際バラとデニングショウ「まどろみの午後」に

はじめの一步は小さい。でもすべてはここから始まる。絵の制作に力を注ぎこんでいたそう遠くない昔。「宙（そら）の風」シリーズから「宙の旅」シリーズへと思いは宇宙にひろがっていた。制作の合間にはこつこつと庭造りにも励む日々があり、ある時思い立ってガーデニングショーに出展一受賞を重ねるうちに、幸にも安行造園の社主、故松本孔志氏に請われて顧問として迎えられることとなった。

プロとして初めての仕事となった川口のア・シード建築設計事務所の庭。灌木と雑草が丈高く生い茂り、足の踏む場さえ見出しがたかった敷地に立った時、強く「可能性」を感じた。小さな築山を築き、鯉の放たれた四角い池には園路を巡らし、建物に沿って半円の石貼りのテラスを張り出して、ベンチを置いた。ひと月の後、そこはさわやかな風の通り抜ける憩いの庭へと変貌をとげた。今、その庭は、毎年秋に開催される「川口安行オープンガーデン」にエントリーしてハレの日を迎える。



ア・シード建築設計事務所の庭

私の庭造りへの思いに共感を寄せてくださる方々との出会いは続く。人生の夢を実現した新居の庭を、お任せくださった方には木製の柵のある庭を、バラの庭を夢みた方にはアイアンの柵につるばらの絡む庭を、と造るうち、庭とともに幾つもの新たな幸せが生みだされるシーンに出会ってきた。そんな出会いのなかにすべての苦労は泡のように消える。

そして次の一步。いつかはと願っていた公共空間での造園を依頼される日がきた。複合的商業施設である「ウニクス南古谷」での仕事。無機的で味気ない施設の空間に造園の力で新たな息吹を吹き込んで一、というのが依頼主のP&Dコンサルティングの意向であった。広いプロムナードには彫刻的に刈りこまれたコニファーを並木のように配置し、憩えるようにコンテナを添えたベンチを要所ごとにおいた。そして道路とのヘッジに植えられた四季の草花が訪れる人を優しく迎える。

時折メンテで訪れると、行き交う人々の笑顔に、ここが愛される空間となっているのを実感する。それが私の仕事の喜び。幸せの時間。



南 三一郎

建築家

南 三一郎建築設計工房主宰
日本建築美術工芸協会会員
調査研究部会部員

調査研究委員会では、継続的にパブリックアートに関する研究を進め、2009年「パブリックアート再考」をまとめましたが、以降アートを取り巻く状況もさらに変化を呈し、再度見つめなおす必要があると考えられました。そこで「パブリックプレイス」という「場」のポテンシャルや文化性にも注目し、議論の展開を図るものとしました。

現在は調査研究部会と名を変え、4つのテーマ～バランス創造科学と人の心の科学、エコロジーとアート、地域風土に根差した文化芸術活動、評価・政策システム～を各分科会にて調査研究してきました。その中で今回、評価・政策システム部会にて「アーティスト選定要項及び選定基準 試案」が中間報告として成果を見ましたので、講演及び報告のかたちで公表させていただくこととしました。

進行は、先ず工藤安代氏（NPO法人アート&ソサイエティ研究センター理事）に「パブリック／コミュニティ／アートーアートと場の文化性とは？」をテーマとして講演をいただき、パブリックアートの成り立ちから時代による変遷、今日の課題まで、豊富な資料・

事例・海外事例をもとに、現在の状況を概観しました。

特に公共空間のアメニティに対する意識の向上により、パブリックアートの選定・設置から管理にかけて、市民参加による自主的な「パブリックプレイス」の形成がなされつつあるとの海外事例の紹介には興味深いものがあります。

講演テキスト抜粋



特に作品決定の対話や地域の調査が行われ、従来のパブリックアートの立ち位置が、場の歴史、場の文化的特色、地域住民の特色、地域の問題／課題を踏まえ、イシュー・スペシフィックやオーディエンス／コミュニティ・スペシフィック（アート）へと展開されていることは、注目に値すると思います。

報告は、講演にて指摘された市民の参加による「パブリックプレイス」形成に必要なと思われる実務的なプロセスに注目し、パブリックアートが市民の資産として認知されるよう、議論の透明性を確保するため、アート選定に係わる試案を提案しました。内容は会員に先に配布した「アーティスト選定要項及び選定基準 試案」小冊子をテキストにその内容に沿って行いました。

試案はパブリックプレイス整備を目的とするパブリックアート設置に至るプロセスを検証し、それに係わる人材～発起人、支援者、アドミニストレーター（管理者）、コーディネーター、アーティスト、アドバイザー～の役割を明確化することから始まり、要項の作成から、公開のコンペやプロポーザルによる人材選定、評価の公表、その後のフォローに至るプロセスを概論しました。

トークにおける討議では、建築家からはコーディネーターやアーティストがプロジェクトに参加するタイミングの見極めの困難さが指摘される一方、アーティストの立場からはプロジェクトへの早期の参画を望む意見が出されました。今回の試案が現実性を帯びるためには実践的な展開の必要性が痛感されます。a a c a は建築・美術・工芸などに係わる日本唯一の団体です。環境整備に係わるアドバイザー（評価機関）として活動の展開を図ることも必要ではないかと思えます。

トークは継続予定しています。また、先にあげたテーマの4分科会は鋭意研究活動中です。ともに研究に参画し、議論を展開してくださる方々を募っています。

モダン・パブリックアートの誕生 —モダン抽象彫刻作品—

1960s~70s中頃 一挙大—

都市の「アートコレクション」として 行進によるパブリックアート政策のほかに

美術館空間
↓
都市空間

パブリックアート事業の見直し

アーティストの選定委員に市民が参加する方向へ転換

ステータス	参加人数	投票数
建築/デザイン専門家	1/16	70%
アーティスト/プロシナリ(建築家である)	1/16	63%
建築専門/プロシナリ(建築家ではない)	1/16	63%
ビジネスリーダー	0/16	34%
コミュニティ/市民関係者	1/16	74%
コミュニティ/市民関係者	1/16	71%
パブリックアート/プログラム関係者	0/16	19%
その他	0/16	20%

パブリックアート事業の見直し

市民が作品制作のプロセスへの参加

プロセスへの透明化
・作品内容決定の前に地域住民との対話や地域の調査

1) 場の歴史
2) 場の文化的な特色
3) 地域住民の特色
4) 地域の問題／課題

現在

これまで
Site Specific
場の動的な特性に合わせる
空間の環境、素材、実装、使用目的等

イシュー・スペシフィック
Issue Specific
オーディエンス/場/コミュニティ・スペシフィック
Audience/Community Specific
地域の課題/歴史性、文化性を反映する



米林雄一

彫刻家

東京藝術大学名誉教授

日本建築美術工芸協会会員

第 184 回フォーラムが 9 月 3 日、AGC スタジオにて行われました。文化事業委員会フォーラム部会長立石博巳氏司会により、協会 岡本 賢会長挨拶の後、「彫刻その宇宙への夢（宇宙モデリング）」と題した、彫刻家米林雄一氏の講演が始まり、第一部は自作品の紹介、第二部では宇宙モデリング国際宇宙ステーション ISS 内での映像 DVD 映写、軽量粘土でのワークショップなどが行われました。

第一部では米林氏の作品 10 点が紹介され、最初の作品は 1964 年に作られた「宇宙の客」（二紀会出品、セメント製）で、奇しくも後年 2008 年 JAXA 国際宇宙ステーション「きぼう」と関わることになることは夢にも思わなかったと思いますが、その当時から宇宙が好きだったそうです。

1968 年当時浅草寺にあった門の土台石をもらって 2 年がかりで制作されたお話とか、樗の一本に突進するかのように取り組みされたお話は米林氏の若い時代の情熱を感じました。また国際シンポジウムでチェコスロバキアにいらした時の 1968 年 8 月 20 日、ロシア軍がチェコスロバキアに侵入し空港が閉鎖になり、1 週間ぶりに外国人は国際列車でウィーンに出て、彫刻シンポジウムは慌しく終了となったお話、その時の作品も披露されました。

1970 年代になりますと、木と鉛の作品が多くなり、「毎日現代美術展」で東京国立近代美術館賞を受賞した時、故加藤貞夫先生の批評が毎日新聞に載り、とても励みになったそうです。



1980 年代は、形が円形に、より自由になり、野外彫刻にも取り組まれました。富山の山奥有峰ダムの広場にあるダム開設 50 周年記念モニュメントは滑り台も付いて、高さ 4メートル 50 センチもある大きな作品でした。（写真左下）

最後に、2010 年第 22 回 aaca 奨励賞受賞作品「発展の塔」（神戸理化学研究所計算科学研究機構シンボルモニュメント）はソロバンを縦にしたような高さ 8メートル 40 センチの天に聳えるような素晴らしい作品でした。抽象彫刻、パブリックアートの第一人者である米林氏の作品に触れて、彫刻の面白さを堪能いたしました。

第二部では、宇宙モデリング、宇宙ステーション「きぼう」が内映像 DVD で紹介されました。JAXA と東京藝術大学との共同研究により、「微小重力環境」での芸術表現は世界初、宇宙芸術への挑戦です。無重力の「きぼう」の中で、アメリカ人宇宙飛行士が軽量粘土で人型を作る。室温 20 度の中で船内の床に右足を固定して、地上と交信しながら人型を作っている様子はとても興味深いものでした。



アルミボックスに入れて宇宙から戻ってきた人型は異次元から来た不思議なものに思えました。

私たちにも軽量粘土が渡され、人型らしきものを作りました。宇宙からの視点による地球観と地球からの宇宙観、それぞれの発想を比較し、組合せることにより、人間についてのイメージが広がります。創造の領域もまた、広がることを想像しました。宇宙で感動を創る「きぼう」の活動など、国として取り組んでいるのは諸外国より日本が進んでいるそうです。米林氏の宇宙的視野の芸術に触れて、とても有意義な夜でした。

講演後の交流会では、多くの方が参加され、米林氏のお話の余韻に浸っていらっしやるようでした。

（フォーラム部会 村松勢津子）



三上 紀子

建築家

レジオン・コンサパティブ(株)

日本建築美術工芸協会会員

この度、「“美味しい“美術館巡り」というコンセプトに心惹かれ、箱根研修旅行に参加させていただきました。この研修旅行では6つの美術館と4つの美味しい御馳走を賞味することが目的とのこと。期待に心躍らせ小田原駅に集合、9月初旬台風が近づき雨模様が心配な天候の中、総勢7名の会員の皆様方と2台の車に分乗し箱根を目指し出発しました。

途中、国道1号線沿いの鈴廣かまぼこの里へ寄り、趣ある街並みをつくる古民家とかまぼこ博物館と市場を見学しました。

さて、第一目的地の岡田美術館は、2013年秋にオープンしたばかりの美術館で、約5,000㎡の展示面積をもつ会場に、実業家岡田和生氏が収集した日本・中国・韓国を中心とする古代から現代までの美術品が展示されている美の殿堂です。建物正面のガラス越しに迎える壁画「風・刻」は12m×30mの巨大迫力です。庭園内に建つ日本家屋「開化亭」では、庭を愛でながら美味しいお弁当を頂きました。



次に向かうはポーラ美術館です。森の中に建つガラスの館内ではモディリアーニ展が開催されていました。そして常設展示のガラス工芸や絵画を鑑賞した後は森の遊歩道へ。朝からの雨も上がり、瑞々しい森林浴です。そうしているうちに夕暮れも近づき、仙石原の宿へ向かい温泉に親しんだ後は、美味しい晚餐。粛々と一日目の研修は終わりました。

二日目は打って変わっての晴天の下、早々に宿を後にし、元箱根の玉村豊男ライフアートミュージアムへ。芦ノ湖湖畔でのブレイクファーストが目的です。箱根西麓野菜のレストランとミュージアムショップが併設されていて、大きな石釜のある厨房では若いスタッフが活き活きと働いています。朝の清々しい空気につつまれた朝食はパニーニのセット。美味しい野菜もさることながら、一枚一枚絵柄が異なる玉村豊雄氏のお皿もまた“美味しい”御馳走のひとつでした。



その後はこの日のサプライズにて、箱根やまぼうし(浜美枝宅)へ。3軒の古民家を移築し改修された

という邸では「美食仲間のための美しいテーブル展」が開催されていました。屋内には骨董和家具などセンスあふれるしつらえの数々。四季を表現した素晴らしいテーブルセッティングを堪能し邸を後にしました。

仙石原のススキを眺めながら、一行は三島のクレマチスの丘へ向かいます。クレマチスの丘は広大な敷地の中に3つの美術館と文学館が建っています。今回はベルナール・ビュフェ美術館とヴァンジ彫刻庭園美術館を訪ねました。瀟洒な円弧を描くビュフェ美術館。旧館は1973年建築家菊竹訓氏の設計です。穏やかな外光がこぼれる中庭をながめながら回廊を辿ると新館へと続きます。1945～1999の作品の数々、貴重な版画や資料を拝見することができました。この美術館の地下ではユニークな美術館を発見。その名も「こどもミュージアム」。ビュフェの作品にまつわる様々な遊具があり、ビュフェの世界に入り込める仕掛けです。すっかり子どもの気分に戻り遊んだ後はクレマチスの丘を移動し、さあ今回の研修旅行のテーマ～美味しい美術館巡りのメインイベント、リストランテ プリマヴェーラでのランチです。イタリア語で「春」「物事の始まり」を意味する「プリマヴェーラ」。大きなガラス張りの開口部に囲まれた店内の空間は緑に包まれ、まるで森の中で食事をしているようです。一皿一皿趣向のこもった美しいお料理はまさに芸術です。



旅の最後はヴァンジ彫刻庭園美術館へ。ヴァンジ彫刻庭園美術館の特徴は、彫刻作品の展示の素晴らしさに加えて、連続するシークエンスの美しさにあります。アプローチをくぐり、ゆるやかな下り坂になる前庭を歩いていくと前方には青い景色が拡がり、芝生に点在する彫刻作品と白い玉砂利のランドスケープがつづきます。敷地の傾斜を利用し設計された美術館の建物は、展示作品を追っていくと自然と下の庭園に出るように動線が計画されており、庭園には200品種のクレマチスの花が咲き乱れ、その間を囁くように野外彫刻作品が展示されており、アプローチから続いた空間のストーリーがここで最高潮に達します。まさに空間・アート・時間の三者が三位一体となった瞬間でした。

走馬灯のようにたくさんのシーンが駆け抜けていった2日間。アートにひたる美味しさをあらためて感じた次第です。この研修旅行にて大変お世話になりました皆様方に厚く感謝を申し上げます。



街に飛び出す作品展 「街なかミュゼ」 出品作品 報告

街に飛び出す作品展（10月25日～11月3日）は盛況のうちに終了しました。多くの作家の皆様のご参加ありがとうございました。ご協力いただいたオーナー様、スターツコーポレーション（株）に御礼申し上げます。37点もの作品が建築会館ギャラリーに展示され、10日間の会期に多数の方々が訪れました。

10月27日午前中、第一次審査が協会選考委員により実施され、出展作品の中から20作品が「街中ミュゼ」の会場となる3か所のプロジェクトに推薦されました。午後はそれぞれの課題の、オーナー・事業者であるスターツコーポレーション(株)の担当者の審査が行われました。その結果以下の作品が選ばれて竣工に合わせ各建物に展示される予定となりました。

課題 A （平成27年6月竣工予定）

建物名：神奈川計画

所在地：横浜市神奈川区

出展者：

鈴木法明 ようこそ21世紀へ 種を播く人
（金属・立体）

帆足枝里子 景 No.2（土・平面）

野口真理 黄の中に風（陶・立体）

平山健雄 無題（ガラス・平面）



課題 B （平成27年3月竣工予定）

建物名：某本社ビル計画

所在地：墨田区向島3丁目

出展者：

山崎和子 Move on Time（布・平面）

白野順子 地球の輝き（キルト・平面）

中野恵美子 To Where? - Machupicchu
（染織・平面）

山崎輝子 雨水（うすい）（皮・平面）

幡（ばん）（皮・平面）

安河内敦子 シェル No.3（ガラス・立体）



課題 C （平成26年11月竣工予定）

建物名：春江町計画

所在地：江戸川区春江町

出展者：

鍵井保秀 SWEET HEARTS
（ポリエステルシート・平面）

GOLDFISH（琉金）

（ポリエステルシート・平面）

川原 昭 優遊（FRP・立体）



オープニングパーティーに先立ち、オーナー・スターツコーポレーション担当者並びに作者・作品の紹介があり、選出された作品の作者には、協会会長 岡本 賢より推薦状が手渡されました。

パーティーでは100名を上回る参加が有り、残念ながら選出されなかった作者の方々も含めにぎやかに交歓されました。

来年度も引き続き「街に飛び出す作品展」の開催に向けて課題選定の準備を進めています。

皆様の応募をお待ちしています。

（実行委員長 安河内敦子）

夏季 役員・委員会交流会

平成26年度 夏季役員・委員会交流会が8月28日（木曜日）天候不順で激しい降雨のなか、丸の内「ポールスター」に47名が集まり開催されました。中島名誉会長はじめ、岡本会長以下理事12名、監事2名、各委員会部員14名、それに4月～8月までの新入会員10名が参加されました。

宇津野副会長の乾杯発声を得て、交流会は賑やかに進み、中盤新入会員の紹介及び挨拶があり、それぞれ新入会員から自己紹介・会社PRが披露されました。予定の時間も瞬く間に経過し、盛会のうちに散会致しました。



開東閣 見学会

平成26年9月16日（火曜日）三菱地所㈱のご好意により、高輪と品川にまたがる八ツ山台に在る、旧岩崎家の別邸である「開東閣」の見学会が催されました。非公開のため人数制限があり希望者が多数となり先着の37名が見学しました。開東閣は明治22年岩崎彌之助が、伊藤博文から土地を購入し駿河台本邸の別邸地とした。明治36年洋館の建築に着手、設計をジョサイア・コンドルに依頼、明治41年に完成した。昭和13年に長男岩崎小彌太が、土地建物を三菱社に譲ったときに開東閣と命名された。

太平洋戦争末期、空襲を受け石造りの外壁の一部を残しただけで焼失した。昭和36年に三菱系各社の協力を得て、三菱地所の設計により復原され、グループ各社の迎賓施設として今日に至っている。

見学会は、天候に恵まれ晴天のなか、建築家をはじめ美術・工芸・庭園など広い分野の会員が集まり、副支配人の平松氏の解説をうけたのち、内部の各ホール、バー、ベランダ、そして庭園見学した。

都心とは全く感じさせない雰囲気と静寂に感銘を受け散会した。

（総務部会部会長 石田真人）



新入会員

個人会員

石川素樹	〒108-0073	港区三田5-7-8-1302	TEL 03-6809-3999	石川素樹建築設計事務所
石垣 健	〒140-0015	品川区西大井3-12-3	TEL 03-3775-2323	COMA DESIGN STUDIO
高橋 賢	〒340-0035	台東区西浅草3-20-14	TEL 03-5828-8839	小岩金網(株)
富永泰雄	〒408-0313	北杜市白州町横手1620-279	TEL 0557-35-4213	art work pot man
星 素子	〒168-0063	杉並区和泉2-45-11ハ-カイト 渡良105	TEL 090-8102-7702	Sun Face Japan
松本治子	〒235-0023	横浜市磯子区森3-12-8ヒルイト 屏風ヶ浦103	TEL 090-3107-9237	工芸家（タイル）
山崎和子	〒142-0063	品川区荏原3-7-2-1002	TEL 090-9318-8215	工芸家（染色・布）

法人会員

(株)アマント・ミラト・ジヤパン 〒232-0041	代表取締役社長 玉野真才 横浜市南区睦町1-5-1	担当 同 左 TEL 045-721-4151
(株)安藤大理石 〒140-0013	代表取締役社長 三和二郎 品川区南大井6-24-10 カドヤビル3F	担当 営業部 渡辺英徳 TEL 03-3765-1114
(株)四門 〒101-0061	代表取締役 那波市郎 千代田区三崎町2-4-1	担当 総務部 有房克之 TEL 03-3265-2857
愛知(株) 〒104-0033	東京都中央区新川1-17-25 取締役東京営業部長 島本健司	担当 東京営業部スペース開発 G 渡邊 均 TEL 03-6222-0816

会員の移動

株式会社 三菱地所設計	法人住所変更	〒100-0005 千代田区丸の内2-5-1 丸の内二丁目ビル
昭和テクノフォーム(株)	法人名称変更	旧社名 明和建材株式会社 担当者変更 顧問 豊田泰裕
A I S 総合計画株式会社	法人名称変更	旧社名 (株)荒井設計
(株)NTTファシリティーズ	法人担当者変更	藤田 明

東日本大震災 「芸術文化復興預金」 への募金のお願い

2014年10月末現在 98,704円

協会では、東日本大震災により逸失した文化財及び地域文化の復興のため、協会指定団体へ26年度に寄付を行なう事になり預託先を選定中です。会員の関係先で希望団体が有りましたら事務局迄お知らせください。会員の皆様には活動やチャリティー活動等による売上の一部を募金に協力して戴きますようお願いいたします。

復興預金口座は下記に記載いたしました。

郵貯銀行 港芝五支店 当座預金 口座名 : AACA芸術環境復興預金口座
店番 : 019 口座番号 : 0338383

編集後記

このたび25周年を期して会報の構成を刷新し、表紙には会員の作品を掲載、内容も会員の皆様の活動や、一般の方々からの寄稿文等を中心に編集致しました。会報編集部会は、会員の有志の皆さんで編成され、記事の収集から編集・発送まで協力しながら運営されています。

会員の皆様の作品紹介、活動報告、展覧会、個展・出品展等のご案内、企業の広告等を会報に掲載いたします。

詳しくは会報編集部会に、ご相談ください。

発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会

発行人 会長 岡本 賢

〒108-0014

東京都港区芝5-26-20 建築会館6階

Tel 03-3457-7998

Fax 03-3457-1598

Url <http://www.aacajp.com>

E-mail info@aacajp.com

編集 総務委員会 会報編集部会

部会長 野口 真理

部員 飯田 郷介 石田 真人 竹生田 正

徳重 千里 中村 弘子 山崎 輝子

事務局

印刷協力

美和野印刷株式会社